

24 二十世紀前半における京都・岩倉の

「国際化」について (その二)

橋本 明

明治期以降、わが国の国際化の過程で生じた「岩倉は日本のゲール (Geel) である」という認識のみが、岩倉を近代精神医療につなぎとめることができた。この認識がなければ、明治期以前に数多く存在した伝統的な治療法の一つとして、早晩衰退し、消滅し、忘却される運命をたどったはずである。本研究の目的は以上の点を検証しながら、岩倉の精神医療史を読み直すことにある。この際、本当に「岩倉は日本のゲール」なのかといった評価の問題は重要ではない。その認識が生まれ、維持され、強化されたこと自体が重要なのである。

さて、ロシア人医師スチーダ (Stieda) に由来すると理解されている「岩倉は日本のゲールである」という認識の起源をさぐっていくと、これまで喧伝されてきた岩

倉の発展史は虚構に満ちていることがわかる。京都癲狂院の設立(一八七五年)や精神病患者監護法(一九〇〇年)によつて瀕死の状態にあつた岩倉を、ヨーロッパ留学を終える頃ゲールを視察した呉秀三が擁護し(一九〇二年)、岩倉を訪れたスチーダの「岩倉は日本のゲールである」との発言(一九〇六年)で外国人から「お墨付き」を与えられ、土屋栄吉の尽力などで岩倉の名も海外に知れ渡つた、というのが一般的な理解である。だが、呉秀三はヨーロッパ留学以前に岩倉をゲールと類似のものと既に認識しており、『精神病学集要・後編』(一八九五年)、昨年の本学会でも示したようにスチーダ発言の出所は日本側の着想であると考えられる。とすれば、この認識はどこまで遡るのか。

一八八五年、ドイツに留学中の榊俣はベルリン精神病学会で、「日本の癲狂事情」(Ueber das Irrenwesen in Japan)を報告し、京都癲狂院に触れているが、岩倉の言及はない。榊が留学していた当時のベルリンは、ゲールをモデルにした精神病患者の家庭看護のまさに導入期であつた。榊も訪問している市立ダルドルフ (Dalldorf) 精

神病院では一八八四年にザンダー (Sander) の指導で家庭看護が始まり、榊が精神病学を学んだメーリ (Meeri) はそこで医長をしていた。一八八六年に帰国した榊は、十九世紀終わり頃のヨーロッパにおける家庭看護への関心のピークを肌で感じたことは想像に難くない。一方、一八九〇年の私立京都癲狂院の院長・高松彝による「ペンシルバニア癲狂院閣下ニ送ル答辯書」では、岩倉が未だ伝統的医療に属するものと捉えられている。一八九一年にベルリンに留学した島村俊一は榊と類似の留学環境のもと、ダルドルフ精神病院で家庭看護の実際を知り得ていたに違いない。島村は一八九四年十一月に帰国し、十二月には京都府医学学校教諭に就任した。そして、翌年には呉の『精神病学集要・後編』が出され、注目すべきことにゲールと岩倉が同じ「私宅看護」の範疇で取り扱われた。これは実質的に「岩倉は日本のゲールである」との認識に等しいと考えてよからう。ただし、この着想が呉のオリジナルであるかどうかは不明である。榊、島村、ベルリン・ダルドルフ、家庭看護、京都、というキーワードを羅列したところで、「岩倉は日本のゲールで

ある」という認識の出発点は特定できないが、この着想は榊や島村のベルリン留学体験と不可分の関係にあるのではない。しかも、高松の「答辯書」の認識が精神医学界に共有されていたものだとすると、『精神病学集要・後編』が一八九五年に発行されるまでの約五年の間に岩倉認識の変化があったことになる。

だが、一九〇六年にスチーダをして「岩倉は日本のゲールである」と言わしめるまでには、なお十年以上の時間を要する。この間にスチーダ発言を導く素地を用意したのが、言うまでもなく呉秀三であり、彼の留学体験が「岩倉は日本のゲールである」という認識の総仕上げに決定的な役割を果たしたのである。

(愛知県立大学)